## みおしえ

タガラあるいは栴檀の　その香りは微かなり
しかし戒ある者の香りは　最上にして神々に薫る
（法句五六）

《因縁》

この法は、仏が、ヴェール林（竹林精舎）に住んでおられたとき、マハーカッサパ（摩訶迦葉）長老の托鉢食について説かれたものである。

ある日、長老は、七日を過ぎて滅尽定から立ち上がり、「ラージャガハ（王舎城）で各家を順々に托鉢しよう」と出かけた。すると、神々の王サッカ（帝釈天）の美しい五百もの侍女が現われ、長老のために托鉢食を用意し施した。しかし長老は、托鉢の目的が貧しい人々に布施による功徳を積む機会を与え、かれらを愛護することにあったため、これを断った。彼女たちは三度断られ、サッカに相談した。しかしそのうち、サッカは自ら布施をしたくなり、貧しい老人に変身し、同じく貧しい老女に身を変えた妻スジャーターを伴い、布施をすることにした。長老はかれの托鉢食を受けた。しかしその美味なる匂いから、かれの正体を知り、「驕ることはよくないが、善行の功徳はある」と諭した。

仏は、サッカが喜び、空中で感嘆の言葉を発しているのを聞かれた。そして、比丘たちに、「神々の王サッカが、わが息子（マハーカッサパ）に、その戒の香りゆえにやって来て、托鉢食を施しました」と言って、この法を示された。

《教え》

戒の香りとは、徳による香りである。それは天界の神々にも人間界にもあらゆるところに薫るという。「戒」とは善き意思にほかならない。それは善き業、善き行為でもあり、具体的には五戒、十戒、二三七戒、三一一戒などとなる。その根本は、不殺生・不偸盗・不邪淫・不妄語・不飲酒（酔って殺・盗・淫・妄の可能性を作らないこと）の五戒（常戒）にあるが、そのすべては、「自他を害さない」という慈悲と智慧に裏づけられたものといってよい。一般の飾りは男女や年代の違いに応じて使用されるが、この善き「戒の飾り」は、生涯、誰にも一切の区別なく用いられ、輝くものといわれる。（ダンマパダ全詩解説　片山一良参照）

## お題目で成仏する十七

お題目を唱えて成仏すると言うことにおいてどんな仏に成るのかが明確にならなければならない。つまり成仏する目標となる仏の実態、姿、である。日蓮大聖人は本仏の姿を大曼荼羅ご本尊として図示されている。大曼荼羅ご本尊は、霊山浄土で教主釈尊が法を説いている一座の御姿を持ってすべての衆生の総和した成仏相を示している。全体生命の成仏したお姿である。

ここにおける仏とは個人としての仏ではなく宇宙全体を仏の生命体として捉えるのである。これは法によって宇宙の全ての命が総和した姿である。妙法と言う宇宙根源の大生命とそのお姿であるご本尊が成仏の目標であるということは、理解しがたいであろう。しかし大聖人は法華経を持ち南無妙法蓮華経と唱え奉る我らの胸中に御本仏が存在するんだと申されている。すなわち大聖人は、次のように示されている。

「此の御本尊全く余所に求る事なかれ・只我れ等衆生の法華経を持ちて南無妙法蓮華経と唱うる胸中の肉団におはしますなり」（日女御前御返事）

この御本尊は、全くほかに求めるものではない。ただ私たちが法華経を受持して南無妙法蓮華経と唱える胸中肉団あらわれるのです。

すなわち我が己心中に大曼荼羅ご本尊があると言う事は我々が大曼荼羅本尊と同体であるという事である。これは一念三千によって成立する。我らの心に大宇宙大曼陀羅ご本尊は具足している。ただその自覚と仏の働きが我らに無いのである。

またご本尊の中に我々は生かされている。法華経を持って南無妙法蓮華経と唱えれば己心に本尊は有り。また南無妙法蓮華経と唱えれば我らは大曼陀羅の世界に入りうるのである。

ここで大切なのは南無妙法蓮華経唱えて我らが全ての命と調和し、全宇宙の総和の成仏をめざすことである。大曼陀羅ご本尊は全宇宙の総和の成仏のお姿である。